

論文の和文要旨

論文題目	課題解決に向けた三者間共同作業における言語行動 —日本語とロシア語の対照研究—
氏名	ツオイ エカテリーナ

本論文は、課題解決に向けた三者間共同作業における日本語とロシア語の言語行動を分析し、両言語における共同作業への取り組み方のパターンを記述したものである。研究方法としては、筆者が条件を統制し収集した会話データを用い、話者交替、発話行為および配慮言語行動の3点に着目することによって、課題解決に向けた三者間共同作業を複数の角度から捉えた。結果として、共同作業への取り組み方について、日本語のデータでは「肩並び型」のパターン、ロシア語のデータでは「正対型」のパターンが示唆された。

本研究で分析対象とした会話には3つの特徴がある。それは、①「三者間会話」であること、つまり、3人の主体が「話し手」ないし「聞き手」の役割を担い、やりとりをすることである。そのやりとりには②「課題解決」という目的がある。そして、課題解決は他の参加者との③「共同作業」によって達成されるという特徴である。本研究は、これらの3つの特徴を活かし、課題解決に向けた共同作業における日本語とロシア語の言語行動を統合的に捉えることによって、「一つの目的に向かって共同で作業する」という活動への取り組み方を探究することを目的としている。

「三者間会話」であるという特徴に関しては、3人のいずれかが話し手になり、話し手が聞き手になるという話者交替の方法に焦点を当て分析した。「課題解決」が目的であるという特徴に関しては、発話行為「提案」を取り上げ、その形式および、提案者と被提案者の相互行為を分析した。さらに、「共同作業」という特徴に関しては、配慮言語行動に焦点を当て、参加者の間でどのように協力関係が構築・維持されるかを分析した。

本論文は7章で構成されている。第1章では、本研究の位置づけ、意義、目的および課題を示した。第2章では、話者交替、発話行為「提案」および配慮言語行動に関する主な先行研究を紹介し、第3章では、会話データの収集方法および文字化資料の作成方法について述べ、本研究における分析単位および分析項目について説明した。

第4章では、話者交替におけるターン割り当て方法に着目した。本会話データでは、日本語、ロシア語ともに現在の話し手による次の話し手の選択より、次の話し手自身による「自己選択」のほうが多かった。

現在の話し手が次の話し手を選択する場合の話者交替では、両言語では次の話し手が非明示的に選択されることが多かった。相違点としては、日本語のデータでは、会話参加者が「丁寧体」と「普通体」を切り替えることによって、発話の相手を特定の1人に絞り込むことが観察された。一方、ロシア語母語話者は、人称代名詞や動詞の単数形を用いることによって次の話し手を1人のみに限定することがみられた。

「自己選択」においては、発話の重なりが生じやすいことから、発話の重なりに着目し、ターン移行の適切さの観点から、発話の重なりをターン移行に適切な箇所におけるもの、および適切ではない箇所におけるものに分類した。その結果、日本語母語話者もロシア語母語話者もターン移行に適切ではない箇所で「自己選択」を行うことが多いと分かった。

ターン移行に適切ではない箇所に生じた発話の重なりにおいては、日本語、ロシア語ともに、現在の話し手がターンを譲ることが多かった。現在の話し手がターンを譲らない場合は、日本語母語話者は、短い重なりを繰り返すことによって非明示的にターンを要求していた。一方、ロシア語母語話者は、発話を重ねる上、相手を抑制するような表現によって明示的にターンを要求していた。

第5章では、本会話データから「提案」談話を抽出し、課題解決という目的達成において重要となる発話行為「提案」および「提案に対する反応」の示し方に着目した。「提案」発話を「平叙型」、「疑問型」、「命令型」の3つに分類した結果、日本語はロシア語より「疑問型」の発話が多く、「平叙型」および「命令型」は少ないことが分かった。「提案に対する反応」の示し方に関しては、提案への賛否が明確に示される反応および、提案への賛否が明確に示されない反応、という2種類がみられた。前者は、「受諾」ないし「拒否」、後者は、提案への「補足」ないし提案の「保留」を含む。日本語は、被提案者側の賛否が明確に示されない反応（「補足」および「保留」）のほうが多かったのに対して、ロシア語は、提案への賛否が明確に示される反応（「受諾」および「拒否」）が多かった。さらに、日本語の談話例では、被提案者が「提案」に対する賛否を明確に示さないため、提案者側は「疑問型」の発話によって明確な返答を促すことが観察された。一方、ロシア語のデータでは、被提案者が明示的な表現を用い、自主的に提案への賛否を示すことが多かった。

第6章では、話者交替および発話行為「提案」における配慮言語行動について述べた。

まず、現在の話し手による次の話し手の選択に焦点を当て、その際の発話の内容を分析し

た。結果として、日本語では、現在の話し手が相手の意見や同意を求めることによって相手を作業に引き入れ、共同作業において「仲間」を増やすことが観察された。一方、ロシア語母語話者は、相手に補足説明を求めることによって相手を正確に理解し、相手の提案や意見の内容の論理を追うことに配慮するがみられた。

次に、発話の重なりによる発話権の侵害を軽減する配慮言語行動として「言いよどみ」および「共同発話」を取り上げた。日本語母語話者は、「とぎれ」の言いよどみによってターン取りをためらう形で自分の発話の進行を遅らせることが最も多かった。それに対して、ロシア語母語話者は、フィラーを用いることによって、早めにターンを確保しつつも、先行話者が発話を終了するまでは実質的な内容を話さないように配慮していた。また、日本語母語話者は、現在の話し手との共同発話において、ターンを共有することによって次のターンを確保することが多かったが、ロシア語母語話者は、発話の重なりにおいて共同発話をするとは非常に少なかった。

発話行為「提案」に関しては、「提案」の発話内効力を軽減する配慮言語行動としてヘッジを取り上げた。全体として、日本語はロシア語よりヘッジの使用が多かった。しかし、「疑問型」の発話に関しては、ロシア語は日本語よりもヘッジが多く用いられることが分かり、予想とは異なる結果が得られた。

「提案」発話でヘッジとして用いられていた表現に関しては、「平叙型」の発話では、日本語母語話者は、「近似表現」の「～みたい(な/に)」によって、提案の命題内容そのものを曖昧にすることが多かった。それに対して、ロシア語母語話者は、「保護表現」の“*mne kazhetsya*”（「私は～ような気がする」）によって、提案の内容はあくまでも話し手の主観的な見解であることを示すことが多かった。「疑問型」の発話では、日本語母語話者は、「自問風」の疑問を表す「～かな」を用い、話し手が「提案」発話を直接相手に向けないことが多かった。それに対して、ロシア語母語話者は、可能性を表す“*mozhet by't*”（「～かもしれない」）を用い、提案者の確信の度合いを下げる事が多かった。「命令型」の発話に関しては、日本語、ロシア語ともに提案者が程度の低さを表す表現を用いることが多かった。

最後に、「提案に対する反応」の示し方を分析し、被提案者にみられる配慮言語行動について述べた。日本語母語話者は、提案への賛否を明確に示すことを避け、「補足」によって提案者に対して関心および理解を示すことが多く、「保留」によって提案の「拒否」を避けることもみられた。また、「拒否」を示す場合は、被提案者は、提案における問題点を指摘することによって、間接的に「拒否」の反応を示すことが多かった。一方、ロシア語母語話者は、作業が滞らないよう、提案に対して明確に賛否を示してから、他の提案等を述べるこ

とが多かった。そして、「拒否」においては、明示的な表現による負担度を軽減するために、被提案者は「見せかけの同意」という配慮言語行動を取ることもみられた。

第7章では、第4～6章で示した結果をまとめ、課題解決に向けた三者間共同作業への取り組み方のパターンを記述した。第4～6章で検討した言語行動における異同を統合的に捉え、日本語における共同作業への取り組み方のパターンは「肩並び型」、ロシア語における共同作業への取り組み方のパターンは「正対型」とした。「肩並び型」の共同作業では、日本語母語話者は、他の参加者と「肩を並べる」形で共同体を成した上で、同じ方向を向いた一体として課題解決に取り組んでいる。一方、「正対型」の共同作業では、ロシア語母語話者は、課題解決を共同体の中心に据え、他の参加者と正対する形でそれぞれの立場から課題解決に取り組んでいる。

結論として、ターンを独占しようとはせずに、相手に意見や同意を求め、自分の立場を明確にしない日本語母語話者は、他の参加者と一体となり同じ方向から「課題解決」という一つの目的に向かって「肩並び型」で共同作業を進める。それに対して、ロシア語母語話者は、活発にターンを取り合い、自分の立場を明確に示し課題解決への意志をアピールし、相手を正しく理解したいという意志を示す。それは、「課題解決」という共通の目的があるからこそ、異なる立場にあっても、他の参加者と一つの共同体を形成することができるからである。その目的を中心にロシア語母語話者は「正対型」で共同作業を進めるという考察が得られた。